

Title	身体と環境の歴史社会学
Sub Title	Historical sociology of the body and environment (part B Historical sociology of the body and public life, historical sociology of a city, a public, and the body)
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.199- 221
JaLC DOI	
Abstract	While man realized the dream, he found out (lack) continuously and made a new dream. Man's dream is restricted and spreads that there is nothing. Man's greatest dream is release from the "death" which cannot be escaped as long as man is a living thing. Therefore, religion is securing a life in the next world, and established mighty power among people. However, man is going to live a present life the comfortable thing. And man has developed science and technology. Science and technology changed to God and have realized people's dream. However, development of science or technology does not have the use most important for anyone. The merits and demerits of science or technology are complicated. Man has realized various desires by picturing a dream to oneself. People's dream not only leads parents, a friend, and books, but now, it is transmitted through electronic media, such as television, a telephone, and a personal computer. The business by realization of a dream is acting [ man-like ] as man. Man can see various dreams also from not only the encounter with other human beings but one copy of mail, or one-sheet public lottery. Now, in the rich country, the birthrate is falling rapidly. Is this world such the pleasant world that it is difficult to induce for it and a child whether it is the world which does not deserve living? On the other hand, the poor country shows the high birthrate, it is going to tell man's importance-or is the child born in order to escape poverty? In advanced nations, while injuring health by overweight by delicious food, eating disorders, such as anorexia, have spread. However, in the developing country, health is injured by a poor meal and too much labor.
Notes	特集都市・公共・身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- B編 身体と公共の歴史社会学 論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0203">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0203</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 身体と環境の歴史社会学

藤 田 弘 夫\*

## Historical Sociology of the Body and Environment

*Hiroo Fujita*

While man realized the dream, he found out <lack> continuously and made a new dream. Man's dream is restricted and spreads that there is nothing. Man's greatest dream is release from the "death" which cannot be escaped as long as man is a living thing. Therefore, religion is securing a life in the next world, and established mighty power among people. However, man is going to live a present life the comfortable thing. And man has developed science and technology. Science and technology changed to God and have realized people's dream. However, development of science or technology does not have the use most important for anyone. The merits and demerits of science or technology are complicated.

Man has realized various desires by picturing a dream to oneself. People's dream not only leads parents, a friend, and books, but now, it is transmitted through electronic media, such as television, a telephone, and a personal computer. The business by realization of a dream is acting [ man-like ] as man. Man can see various dreams also from not only the encounter with other human beings but one copy of mail, or one-sheet public lottery.

Now, in the rich country, the birthrate is falling rapidly. Is

\* 慶應義塾大学文学部社会学教授

this world such the pleasant world that it is difficult to induce for it and a child whether it is the world which does not deserve living? On the other hand, the poor country shows the high birth-rate. it is going to tell man's importance—or is the child born in order to escape poverty? In advanced nations, while injuring health by overweight by delicious food, eating disorders, such as anorexia, have spread. However, in the developing country, health is injured by a poor meal and too much labor.

## 第一節 人間の夢と科学・技術

地球のどこからでも見える月は人びとに光を与え、時を知らせてきた。人類は夜空に大きく輝く月に、さまざまな想いを寄せてきた。人間は夢をみる動物である。L. マンフォードは、人間が夢の豊かさによって、純粋に動物的な生活から抜け出していったと主張する。かれは人間が文化を生み出す原動力となったものこそ、夢の実現だったというのである (Mumford, 1966=1969: 101)。

1957年のソヴィエトによる人工衛星スプートニク1号の打ち上げは、人類がはじめて人工物を宇宙に打ちだしたことを意味した。当時の米ソの激しい対立は、その後の宇宙開発競争となって現れた。米ソは社会体制の優劣をかけて宇宙開発にしのぎを削った。そして、スプートニクからわずか12年後、アポロ11号は人間の月への着陸に成功した。人類は月への旅という長年の夢を実現したのである。

人間の活動を他の動物の環境から区別しているのは、人間自身が作り出したおびただしい工作物である。しかし生命そのものはこの人工的世界の外にあった。しかし科学の発展は、人間を自然の産物としての制約からさらに解放するために、生命をも「人工的」なものにしようとしている。H. アレントがこのように述べて約半世紀、人間の条件から脱出したいという願望は、生命科学のすさまじい発展をもたらした (Arent, 1958=1994: 11)。そして1997年、ついにクローン羊ドリーが誕生した。今日では、

クローン人間の誕生は社会の問題ではあっても、技術の問題ではなくなりかけている。人類の可能性は、ますます大きくなっている。

人間は夢を実現するなかで、たえず〈欠如〉を見出し、新たな夢を作り出す。次々と生みされる人間の夢には、かぎりがない。人間にとって最大の夢は、人間が生物であるかぎり逃れることのできない「死」からの解放である。したがって、宗教はあの世での生活を保障することで、人びとのあいだに強大な力を確立していった。しかし人間は、現世での生にこだわった。かつて人間としての欲望をほとんど実現したかに見えた秦の始皇帝は、ついに不老不死をわがものとしようとした。かれは各地に、〈不老不死の薬〉を探し出すために使節を派遣した。

人間が延命のために費やしてきたエネルギーは、すさまじいものである。医療はもっとも古くから専門化された知識となってきた。現在では、膨大な数の人たちが直接、間接に医療活動に従事している。高度な技術をもつ医療機関が設置されている。そこでは、「健康」と「延命」とをめぐって、ありとあらゆる可能性が模索されている。こうしたなかで現代医学は、ついに臓器の移植をも可能とする状況を生み出したのである。医学は生きている人間の臓器までも貴重な資源とするにいたった。

こうしたなかで、人々の目を掠めて、貧しきものから富めるものへの肉体の切り売りが現実のものとなっている。貧者が生きるために腎臓、皮膚、眼球などを切り売りしている。第三世界を舞台として、臓器ビジネスが急成長している（栗屋、1999）。また、アメリカでは1980年代以来、生き返ることをもとめる「冷凍人間協会」が結成されている。冷凍人間はマイナス200度の液体窒素に漬けられ、死因となった病気の治療法が開発された暁に、解凍され蘇生する予定になっている遺体である。アルコア社には、多くの冷凍人間が蘇生される日をまって保管されている。

だが、健康や延命となるはずの医療が、事故につながることも少なくない。アメリカ医療研究所(IOM)によると、アメリカでの医療ミスによる

死亡は、ある調査で年間 44,000 人、また別の調査では 98,000 人という結果がでている。さらに投薬ミスによる死亡者が年間 7,000 人以上に達していると推測されている。それどころか、実数はその 2 倍はあると考えられている。

とはいえ、それは豊かな社会での話なのである。世界には人類が誕生以来ひきずってきた飲食の確保を未だに達成していない多くの人たちがいる。世界人口は 21 世紀の突入時に約 61 億人を数えている。そのうち 12 億人が飢えに苦しみ、12 億人が安全な水を手にすることができず、10 億人の成人が、読み書きができない。世界人口は 1950 年から 2000 年のあいだに、25 億人から 61 億人へと 36 億人も増えた。2050 年までに世界人口はさらに 28 億人増えて、89 億人に達すると推測されている (Brown, 2000: 7)。現代ほど多くの飢餓人口を抱えている時代もない。世界の飢餓人口は 1970 年代の中期に、だいたい 4 億人から 6 億人といわれていた (Lucacs, 1977=1984)。その後、飢餓人口はかえって増加しているのである。

人は貧富を問わず、夢のある生活を描いている。今日、人びとの夢はテレビ、映画、書籍、ラジオなどのメディアでさらに想像を駆り立てられている。人間は十分な飲食と酒やタバコの嗜好品にとどまらず、マリファナ、コカイン、ヘロインなどの薬物などで身体の安らぎと快楽を追求している。そしてその夢の実現のために、さまざまなドラマが演じられているのである。

## 第二節 人類の発展と地球環境

人類の誕生は、500 万年以上も前にまでさかのぼると考えられている。人間は地球に登場してまもなく、食物連鎖の頂点に立った。人間はさまざまなものを食べる。しかし人間を食べて生きている大型の動物はいないのである。人間は大型の動物には強かったが、体内に侵入してくる微生物に

は弱かった。人間は誕生以来、マラリア、ペスト、天然痘、ハンセン病、コレラ、赤痢、疫痢、小児マヒなどの感染症に悩んでいた。

人間は活動の大半を食料の確保に投じていた。人類は長いあいだ狩猟採集の生活を送っていた。人間の活動は活発だったが、自然の循環のなかで生活していた。その人類の生活に一大変化を与えたのが、約1万年前のメソポタミアにおける「農耕の発見」である。それに続いて、牧畜がはじまった。地表の形態は農牧業の導入によって大きく変わった。メソポタミアにはじまった農牧業は各地に伝播していった。農耕は食糧生産の飛躍的な増加をもたらした。狩猟・採集の時代の地球の人口は、せいぜい400～500万人だった。農業革命は人口を急増させる。農業は人類に大きな可能性を切り開いたのである。

農業が導入されたところでは、どこでも人口が急増する。農地は時代により場所により栽培品種を変えながら、拡大の一途をたどった。コムギの栽培にはじまった農業は、各種の麦類はもちろん、コメ、ヒエ、アワ、トウモロコシなどの穀物、タロイモ、ジャガイモなどの根菜類の栽培へと広がっていった。人類は農耕と牧畜の導入によって、長年悩まされてきた狩猟と採集にともなう食糧確保の不安定さから解放され、豊かな食糧の確保が保障されるようになったのである。地表の形態は農牧業の導入によって大きく変わった。

その一方で、農業の導入は人びとにとって、土地に張りつく定住生活と一年を周期とする単調なリズムの重労働という新しい生活の誕生を意味した。農牧業は人と動物との接触の機会を増やし、感染症のリスクを増大させた。さらに多くの人間や動物の廃棄物や糞便の堆積と隣接した生活は病原菌による汚染の源泉となった (Cohen, 1989=1994: 72)。

農耕社会は農作物の収穫に左右される社会である。人びとは日々の天候に関心を抱いていた。人びとは天変地異ばかりか、戦争や内乱に翻弄された。さまざまな災害がその脆弱な社会を、繰り返し襲ったのである。

(Sorokin, 1975=1998). 農産物に豊凶は避けられない. もちろん不作がただちに飢餓に結びつくものではない. 不作と飢餓とはあくまで別物である. 農村社会は脆弱だとはいえ, 飢饉に対する備えを怠らなかった. しかし感染症の突発的な流行は人びとを苦境に陥れた.

人びとは悪疫の流行に脅えた. 天然痘, ペスト, ハンセン病, インフルエンザ, コレラ, 赤痢, 疫痢などの感染症が, 断続的に各地で流行を繰り返していた. 天然痘やハシカは最初の流行時にすさまじい被害をもたらす. また, ペストは一度発生すると, 大量死をもたらした. 14世紀半ばに西アジアからヨーロッパに入ってきたペストは, 約1億人といわれたヨーロッパの総人口のうち, 3分の1とも4分の1ともいわれる人命を奪った. ドイツではペストで4分の1とも5分の1ともいわれる村が消滅した. 人びとはペストの恐怖に直面して, 祈るか逃げるしかなかった.

イスラム世界の形成はアジアと北アフリカを結びつける. またモンゴル帝国の出現による東西交通の活発化は疫病をも交流させる. 旧大陸では度重なる疫病の大規模な交流で人びとの免疫力も高くなっていた. しかし新大陸は旧大陸の疫病の流行と隔絶していた. 新大陸は旧大陸の感染症の流行とは無縁だった. だが, コロンブスによる新大陸の発見は新大陸に大惨事をもたらすことになる. アステカ帝国に侵入したコルテスの軍隊は天然痘やハシカの病原菌をばら撒いたのである.

新大陸の人びとは, 当然ハシカや天然痘などに対する抵抗力をもっていなかった. このためコルテスの行くところ, 住民はたいした抵抗をすることもなく屍を重ねていったのである. メキシコの中央部にはコルテスの進入以前, 2500万人から3000万人の人口があった. それがコルテスの侵入後50年もたたない1568年に, メキシコ中央部の人口は300万人に激減する. コルテスが上陸したときの10分の1にまで減少したのである. そして1620年には160万人という最低値にまで達する (McNeill, 1976=1985: 184-185). アステカ帝国やインカ帝国を壊滅させたのは, 実は

ヨーロッパ人の持ち込んだ天然痘やハシカなどであった。新しい疫病が新大陸の二つの帝国どころか、文明をも崩壊させてしまったのである。

その一方で、新大陸の発見は旧大陸には大きな贈り物をもたらした。新大陸からは大量の銀をはじめとする莫大な富が流れ込んだ。さらにトウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、インゲン、トマトなどさまざまな食材がもたらされたのである。とくに、じゃがいもは飢饉に際して飢餓作物として着目され広がっていった。ヨーロッパは18世紀以降人口が増大する。それには、ジャガイモなど新大陸起源の食物の普及が大きな役割をはたしていた。新大陸起源の食物はインド、中国、日本など旧大陸の農業に大きな影響を与えるのである。

18世紀の中葉にイギリスにはじまった産業革命は、新しいタイプの都市を出現させた。それまで片田舎に過ぎなかったところに、突如工場が建設され、その周辺に多くの労働者を集めた。イギリスの市民社会が生み出した自由放任と国家の干渉の排除は、経済の発展に新しい側面をつけ加えていた。そこでは、資本主義が富を生み出す新しい宗教であるかのような様相を呈していたのである。大量の生活物資が、工場で生産されるようになる。しかもその間、エネルギー源として石炭の利用が広がっていた。

資本主義の発展は都市に、莫大な富とともにあらたな貧困をもたらすこととなった。工業都市を構成する二つの因子は「工場」と「スラム」である (Mumford, 1938=1974: 164)。

都市における労働者の密集は、すさまじい居住環境の悪化をもたらしていた。中世の都市は城壁で囲まれていたとはいえ、そのなかに建物が密集していたわけではない。教会や有力者の屋敷には中庭があり、広場や菜園などがあった。都市の発展による混雑と人口の密集は環境を悪化させた。都市貧民の生活水準は19世紀を通じて低下していた。疫病の蔓延は油断のならないものであった。 (McNeill, 1976=1985: 223)。

イギリスは世界最初の工業国家として、世界の各地と交易するようにな



る。イギリスはインドを植民地として深くかかわるようになると、インドの風土病であったコレラがイギリスの船に乗って広がり、世界中に大流行したのである。日本も幕末にはコレラの流行に襲われた。それは江戸が東京になっても変わらなかった。コレラの度重なる大流行は都市の衛生を根底的に考える契機となった。大英帝国の繁栄とは裏腹に、20世紀初頭のイギリスの食糧事情は中世の大飢饉以来なかったほど悪化していた。貧しい人たちの生活状態は繁栄のなかで、半世紀前よりもきびしいものとなっていたのである。イギリスでは1914年においても、10%以上の子供が栄養不足の状態にあり、壊血病、貧血、くる病などの病気が蔓延していた。

### 第三節 人類の進歩と社会の進化

近代の社会は新しい世界観を生み出していた。人類の進歩、進化は啓蒙思想以来の潮流となっていた。コンドルセ (Condorcet) は人間精神の進歩を論じた。かれの思想は A. コントの進歩の体系にも引き継がれた。新しい世界像が次々と提供されていった。さらに近代科学や技術はさまざまな驚異をもたらしていた。宗教に代わって、科学が人びとにさまざまな知識を提供しはじめた。進歩や進化とは、当時のスローガンともなっていた。しかしこれらは、人間の文化に関することにかぎられていた。

ところが、1859年に刊行された C. ダーウィンの『種の起源』は、人間自体の進化を提唱したのである。人類が猿に似た動物から進化したものであるという主張は、聖書の創世紀とも、人間を特殊な存在とする見解とも異なっていた。進化論は、各方面に衝撃を与えるとともに、激しい議論を巻き起こした。しかしダーウィンの理論は、新しい時代をいつくしむ人びとに、歓呼をもって迎えられた。かれの学説は人類の文化の発展の理論に、決定的な影響をおよぼすことになる。

イギリスでは、ダーウィンの学説が T. ハクスレー (Thomas Huxley)

などによって普及されていった。ドイツにおいて、ダーウィンの学説はイギリス以上に大きな影響力を発揮することになる。ヘッケル (Ernst Haeckel) は、生態学 (Ökology) を提唱するとともに、さまざまな科学に統一的視点を生み出そうとした。ダーウィンの進化論は、H. スпенサーの社会進化論が普及する契機ともなり土壌ともなった。スペンサーの社会学は世界各地でもてはやされ、とくにアメリカや日本において大きな影響力を与えた。

社会の形態や進歩に自然環境が深くかかわっていることについては、モンテスキュー (Montesquieu)、テーヌ (Taine)、バックル (Buckle) などによって早くから指摘されてきた。それを科学による「法則」にまで高めようとしたのが、ラッツェル (Friedrich Ratzel) である。ラッツェルは A. コントが人類の進歩を論じるにあたって、空間的要素を看過したと主張する。かれは時間的に空間的に人類の分布、活動、組織を規定している法則を発見しようとする。ラッツェルは大地が人間の紐帯であり集合生活の基礎であるばかりでなく、民族や国家の発展に決定的に影響を与えていると主張する (Ratzel, 1903, 1909-1912)。ラッツェルは、政治地理学が土地の自然配置が民族の発展に及ぼす影響の研究であるとともに、国家の発展に影響を与える唯一の方法と主張する。

社会学者も自然環境が社会に大きな影響をもつことを無視しなかった。E. デュルケムは社会学体系を社会形態学、社会生理学、一般社会学の3つに分ける。かれはラッツェルの地理学を、かれの提唱する社会形態学の別名であるとすら主張するのである (Durkheim, 1897=1993: 68)。ラッツェルの地理学は人間を環境に受動的なものとみる点で、環境決定論的性格を強くもっている。アメリカ大陸の自然環境はコロンブスの前後で変わっていない。しかしアメリカはコロンブス後、発展への歩みをはじめるのである。この点が、ブラーシュ (P. V. Blache) の人間の環境への働きかけを重視した「環境可能論」を展開する糸口となるのである。

さらに人類の進化への関心は、遺伝学の発展と結びつき優生学 (eugenics) を生み出すことになる。優生学は 1883 年にゴールトン (Francis Galton) によって提唱される。優生学は人類の生物的改良を行う科学であった。優生学は社会の見方に大きな影響を与えるとともに、広範に支持者を増やしていった。1904 年、ロンドン社会学会が開催される。その際、優生学は都市社会学とともに大きな部門をなすまでになっていた。社会学会は 1909 年までに、優生学、都市学、教育、社会事業の 4 つの部会に組織されるようになる。(Abrams, 1968: 109; 藤田, 2003: 243)。その間、1907 年には優生協会が発足するとともに、主要都市ばかりか、シドニーにまで支部が設けられる。優生学は各国による違いはあるが、世界中に広がっていった (Adams, 1990=1998)。環境や遺伝は社会の進歩や進化に密接にかかわっていると考えられていた。

人類ははやくから大型動物のリスクから解放されていた。しかし目に見えない形で体内に侵入してくる微生物のリスクに関しては、手探りの状態だった。しかし近代科学の発展は画期的な発見をもたらした。1880 年代には顕微鏡が発明され、病原菌が次々と突き止められる。コッホによるペスト菌の発見をはじめ腸チフス、天然痘、破傷風などの感染症を引き起こす微生物の発見は、人類を悩まし続けた感染症からの解放に大きく貢献することとなった。

近代医学は病気の原因が自然科学によって解明され、その治療法が科学的に確立できるとの病気観をもたらした。西洋で発達した近代医療はインドのアユールヴェーダや漢方など世界の各地で発達していた伝統的医学を徐々に駆逐していった。

医学の発展は大規模な軍事行動を可能にした。それまで兵員の集中が感染症を蔓延させ多くの死者を出すことは避けられなかった。クルミア戦争 (1853-56 年) で、イギリス軍は赤痢による病死者がロシア軍との戦闘による戦死者の 10 倍を数えた。普仏戦争 (1870-71 年) では、2 万人のフ

ランス兵が天然痘の蔓延により戦闘不能に陥った。これにたいして、ドイツ兵は予防接種の免疫によって天然痘の流行を免れた。

日本は近代国家としての存亡をかけて日露戦争を戦った。日露戦争は近代医療による組織的な医療体制を導入していたにもかかわらず、多くの戦病死者を出した。しかしその多くは、脚気だったのである。一説によると、日露戦争での戦病死者 37,200 人余りのうち、脚気による死者は 28,800 人余りを数えたという。ただ、脚気による死者を出したのは陸軍だけであった。海軍は日清戦争の経験から麦飯を導入した結果、ほとんど死者を出さなかった。

第一次世界大戦は大規模な軍隊を戦場に貼り付けた。1914-18 年の間、北フランスの塹壕に数百万人の兵員を集中させることができたのは、発疹チフスにシラミが関わっているという医学上の発見があったからである (McNeill, 1976=1985: 254)。むしろ第一次世界大戦中、高い罹患率を示したのは、梅毒だった。第二次世界大戦は多くの医薬品の発達をもたらした。DDT、サルファ剤、ペニシリン、アタブリンなどが、種々の病気の予防と治療を容易にした。医学的な管理の行き届いた軍隊は太平洋、東南アジア、ロシアの草原などに潜んでいる疫学的危険を緩和させた。しかしその一方で、戦争はまたアヘンや LSD などの薬物を蔓延させたり、心理的傷害をもたらす契機となった。

人口数は国家にとって、国力を意味する。とくに大量の兵員を動員する近代の戦争では、人口数は戦力となった。近代では、国家が国民の身体に積極的に介入し管理しようとする。国家は人口を資源と考えるようになった。フランスは普仏戦争の敗北後、ドイツとの人口数と人口増加率の差に不安を覚えていた。人口の増加は国力の大きさを意味すると考えられるようになっていたのである。大日本帝国も戦前から戦中に、「産めよ殖やせよ地に満てよ」と出産を奨励した。

しかし人口の増大は社会の経済的負担となることも少なくなかった。人

口増加は貧民の増加をもたらしかねなかった。その場合、密かに産児制限がなされた。日本は第二次大戦の敗北で海外領土を喪失したばかりでなく、大量の帰還者を迎えた。さらに平和の回復は出生率の急激な上昇をもたらした。そこで事実上、国家レベルで妊娠中絶を合法化したのである。その後、出生率は劇的に低下していった。

中国は革命後、人口が急増する。毛沢東は増大する人口に対して、食糧を消費する口は一つだが、生産する手は2本として、人口増加はむしろ経済発展につながるとした。その際、人口抑制はマルサス主義として批判された。世界最大数の人口を持つ中国は毛沢東による人口増加の追認で、さらに増大する。しかしその後、中国は史上まれに見るきびしい人口抑制策を取らざるを得なくなった。強力な一人っ子政策が国家の徹底的な監督下で長期間にわたって実施されている。

インドは中国に次ぐ人口数を数えてきた。インドにおける人口の増大は、貧しさの象徴とされてきた。インディラ・ガンジー政権は強力な避妊政策を推し進めた。2人以上の子供がある男には、断種手術を受けることが奨励された。それどころか、強制的な断種手術が大々的に実施されるにいたった。その結果、インディラ・ガンジー首相は総選挙で敗北したばかりか、首相自身が人権抑圧で逮捕されるありさまだった。

人口が国力の基礎だとする考えは根強い。1989年に崩壊したルーマニアのチャウシェスク政権は東欧にありながらも、ソ連圏のなかでも独自路線をとっていた。ルーマニアの人口は長いあいだ停滞していた。同政権は国力の増大には、人口増加を不可欠だと考えるにいたった。そこでルーマニアでは人口の増加のために、避妊知識の普及を妨げたばかりか、避妊具の生産すら禁止していた。スーダンのバシル大統領は2001年8月に国営テレビで、イスラム政党の国民会議に向けたスピーチのなかで、男性に多妻を勧め、現在3000万人の人口を倍增させるように呼びかけた。アフリカ大陸最大の面積をもつスーダンでは、石油などの豊かな資源の開発に

は、もっと多数の人的資源が必要だと主張した。現在、南の貧しい国では人口増加が続き、国の大きな負担となっている。その一方で、北の豊かな国では、夫婦の負担をさけるために、どこでも少子高齢化が進んでいる。

#### 第四節 生命への挑戦と豊かな生活

コッホのペスト菌の発見は近代医学の画期をなした。その後の20年ほどの間に、当時大きな被害を出していたほとんどの感染症の病原菌が確定される。近代医学は高い威信をもった。しかしそれでいて、実際上の効果はわずかなものでしかなかったといわれている。むしろ人びとの健康に大きな成果をあげていたのは、前世紀末以来大規模に押し進めてきた公衆衛生であった。とくに上下水道の整備は乳児死亡率を急激に低下させた。外科治療や医薬品は20世紀に入っても、死亡率を顕著に低下させるほどのものではなかった。

人びとの寿命は飛躍的に伸びていった。それに近代医学が大きな貢献をしたことは間違いがない。しかしそれにも増して、大きな要因となったのが、経済の発展による栄養状態の改善であった。貧困は感染症の大きな要因となっていた。多くの感染症において、患者数は病原菌が発見され抗生物質などによる治療法が施される以前から減少しはじめていた。日本では結核が国民病とまでいわれていた。日本でも経済成長の以前には、回虫、ツツガムシ、サナダムシ、日本住血吸虫などの寄生虫やトラコーマなどが蔓延していた。

1930年代後半から1940年代には、抗生物質の使用がはじまる。第二次世界大戦後は予防注射が普及するようになる。やがてワクチン、サルファ剤、ペニシリンなどの抗生物質や各種のワクチン等が開発され、工業的大量生産によって実用化された。医学は人体への直接的な予防法を確立したのである。近代医学は人類を長年にわたって、苦しめてきた天然痘、ハンセン病、ペスト、結核、コレラなどを解決してきた。20世紀の半ば

以降、感染症患者は激減する。その成果は実に目覚ましいものであった。それを象徴するのが、1980年のWHOの天然痘の絶滅宣言であった。

1930年代の生化学や1950年代の分子生物学の発展は、代謝や遺伝の観点から生命の研究に、新しい道筋を開いていた。生物学は分子生物学の誕生で物理学や化学の基礎をもつとともに、生物と無生物を連続的に理解する展望を与えた。生命現象は核酸やたんぱく質などの細胞内の物質運動としてとらえられるようになった。

医学研究の関心は、感染症から生活習慣病へと移行してきた。近代医学は細菌学に象徴されるように、一つの疾患には一つの要因があるとの前提で研究を進めてきた。しかし遺伝病はそうした前提だけで説明できるものではない。さらに、ガン、心臓病や、血圧症などは、どれも単一の要因に帰することはできないものである。これらの病気の多くは外的な要因とともに、遺伝的要因が無視できないものとなっている。感染症から生活習慣病という変化は、医学研究に転機をもたらしている。

近代国家は経済発展とともに、形態こそ大きく異なるけれども医療制度を整備していった。現在、先進国といわれるところは、どこも医療に大きな出費をしている。1994年の保険関連総支出はGDB比で日本6.8%、イギリス6.6%、フランス9.1%、ドイツ9.1%、アメリカ13.3%となっている。

アメリカは生活水準が高く、かつ他国に比して保健医療関係に莫大な投資を行っている。しかしそれにもかかわらず、世界一の長寿国となっていない。アメリカは公費による医療サービスがほとんど見られない。しかしそのことは、病気の治療が、治療の必要性よりも、診療を受ける患者の支払能力に応じて決まっている場合が多いことを意味している。アメリカは先進国のなかでは、例外的な制度をもっている。

人びとは欲求の充足を求めるとともに、それが孕む危険から自分たちを守るためにさまざまな規制を作り出してきた。それは飲食から衣服にまで

およんでいる。とくにアルコール類に関しては、両義的評価をしていた。人びとの欲求充足の規制が社会の秩序を生み出してきたのである。先進国では1960年代から伝統的なさまざまな規制が紆余曲折を経たにせよ緩和されていった。さまざまな欲望がより人間的であることを掲げて、解放されていった。なかでもオランダは実験場の観を呈している。オランダではマリファナをはじめ多くのドラッグが合法化されている。ヘロインやコカインの常用者ですら犯罪者ではなく、病人として扱われている。

豊かな社会では男女の関係も大きく変化することになる。男女の性的関係が自由になったばかりか、オランダやスウェーデンでは、売春が合法化された。女性のもっとも古い商売といわれた売春が、付加価値税の対象となっている。人びとの関係は生活の豊かさとともに、社会や経済にもとづくのではなく、個人の意思にもとづくものとなっていった。人びとは、A.ギデنزの主張する「純粋な関係」を選択しはじめたのである(Giddens, 1992=1995)。

アメリカでは生まれてくる子の母の3分の1は未婚となっている。しかし男女の自由な結びつきは、その一方で自由な離別をもたらすこととなった。アメリカでは母子家庭が750万世帯以上、父子家庭が200万世帯を超えた。1990年代に生まれた子どもの半分以上は、一定期間、単独家庭で育てられていると推測されている。また、同棲カップルは異性・同性を問わず、550万所帯を数えている。同性のカップルの認知も広がっている。デンマーク、フランス、バーモント州などアメリカの一部などでは、同性同士のパートナーシップが認められている。

2004年、サンフランシスコ市は、同性同士の結婚を認め証明書の発行をきめた。このことに対する意見は賛否二分し激論が巻き起こった。サンフランシスコ市に追随する自治体が増加する一方で、ウィスコンシン州やカンザス州では州法によって、同性の結婚を禁止した。また、ブッシュ政権は連邦憲法の修正でこれを禁じようとした。2004年のアメリカの大統



領選挙と州知事選挙では、同性婚や中絶など倫理に関する問題が大きな争点となった。

その結果、ブッシュが大統領に再選されるとともに、同姓婚の是非を住民投票で問うた11の州のすべてで反対派が勝利した。キリスト教の保守派は力をのばしている。男女の関係は大きく揺れ動いている。

人間は誰しも死を迎える。その最後の時期を苦痛で迎えることは、本人にとっても周囲にとっても辛いことである。安楽死を望む人は多い。このため安楽死が密に行われてきた。しかし安楽死と殺人は紙一重である。だが、オランダやオレゴン州などアメリカの一部の州では、すでに安楽死が認められている。各種のドラッグの使用、避妊、妊娠中絶、安楽死などは社会秩序の根幹とかかわり、しばしば深刻な政治的問題に発展している。急激に変化する現在では、社会を変えるためではなく、社会を維持するためにさまざまな政策が必要とされている。

近代医学の発展は臓器の移植をも可能にした。移植医療は人間の生死の定義を改めて考える機会となった。人間に脳死という新しい概念をもたらした。キリスト教会は脳死に関して寛容であったために、心臓などの移植医療が定着していった。バチカンも魂の抜けた肉体に霊的価値はないと宣言した。しかし日本では、脳死概念は伝統的な死の概念を否定するものとして、大きな問題を引き起こした。その一方で、キリスト教会がこだわってきたのは、避妊や中絶の方であった。それは生殖のテクノロジーの発展とともに、新たな議論を引き起こしている。

アメリカでは伝統的に政府が社会生活を秩序づけることに反発が強い。生殖についての規制に関してもその例外ではない。アメリカでは中絶反対派などの政治的圧力で、受精卵の研究などは補助金を受けられない。1970年代から生殖医療の研究をめぐって、さまざまな議論がなされてきた。連邦最高裁は国家が生殖について国民に介入できないことを判決で確認している。生殖医療について連邦レベルの規制はないが、生殖関係の学

会は細かいガイドラインを作っている。アメリカでは生殖に関する「自己決定権」が尊重され、未婚の男女や同性愛者についても適用されている。精子や卵子の提供による体外受精や代理出産は、ビジネスにまでなっている。遺伝子工学は赤ん坊の髪の毛の色、皮膚の色、目の色などをデザインすることを可能にしている。

イギリスは1978年世界初の体外受精ベビーを誕生させるなど、この分野に早くから意欲的である。生殖医療にきびしい規制を設けているが、自己決定権を尊重し精子や卵子の提供を認めている。また、営利目的でなければ代理出産も認めている。これに対して、フランスやドイツは国家が生殖技術に関して、きびしい規制を行っている。体外受精は認められているが、代理出産は禁止されている。代理出産は不道德であるばかりでなく子どもの福祉に反する危険性があるという。とくにドイツでは、ナチスの時代の非人道的な遺伝の研究が暗い影を落としており、生殖のテクノロジーの発展には慎重になっている。

バイオ技術は次々とあたらしい可能性を生み出している。とくに受精卵に含まれるヒト胚性幹細胞（ES細胞）はアルツハイマー病、ハンチントン病、脳卒中、糖尿病などの難病に画期的治療をもたらすと考えられている。しかし脳死には寛容なキリスト教会も、受精卵から採取されるES細胞の利用には、きびしい態度をとっている。ローマ法王庁は「胚」は人間と同等であるとの見解を発表している。ブッシュ政権もES細胞の利用に、強い規制を加えているなかで、万能細胞といわれるES細胞の研究が民間で進んでいる。

産業化は豊かな生活をもたらす一方で、地球環境にかつてない脅威をもたらしている。大気汚染や酸性雨、森林破壊や砂漠化、土壌汚染や土壌流失、水質汚濁や水資源の枯渇、生物の多様性の消滅などが豊かな生活の影で進んでいる。夢のエネルギーと期待された原子力は、かつての輝きを失っている。核の汚染が大きな問題となっている。放射性物質の処理は、

今後の大きな負担となってくるだろう。産業化の進展による大量生産と大量消費は環境汚染、温暖化、資源の枯渇などを生み出している。

汚染は人びとの体内に食品を通じて、直接取り込まれようとしている。1986年にイギリスの農村で2頭の狂牛病（BSE）にかかった牛が発見された。狂牛病は懸命の拡大阻止にもかかわらず、世界各地に広がっている。また、2003年のSARSの流行や2004年の鳥インフルエンザの流行はアジアで大きな被害を出した。

多量の化学肥料や防虫剤の使用は大量の収穫をもたらす一方で、食の不安を生み出している。各地で有機農業が見直されている。ドイツは農業の脱工業化を進めている。2010年までに、農地の10%を有機化しようとしている。さらに遺伝子組み換え食品は、未知の不安を生み出している。マクドナルドに象徴されるファーストフードに対して、スローフードが提唱されている。汚染の連鎖が危惧されている。

近代医学は天然痘など多くの感染症を克服したとはいえ、完全に勝利したわけではない。人類は新しい感染症の危険に直面している。とくに貧困は感染症を拡大させる。サハラ以南のアフリカでは、エイズの蔓延で平均寿命が急激に低下している。南アフリカのいくつかの国では、成人人口の20%以上がHIVに感染している。これらの国では、医学上の革新が起こらないかぎり、今後10年間で成人人口の5分の1が失われるだろうと考えられている。エイズの流行以前に65歳であったジンバブエの平均寿命は、1998年に44歳に低下している。さらに2010年には39歳に低下すると予測されている (Brown, 2000: 24)。また、SARSや鳥インフルエンザの流行は、人類が未知の感染症に出会うリスクから逃れられないことを改めて確認する機会となった。

## 第五節 科学・技術と未来の神話

近代科学の価値はいくら強調してもしすぎることはない。近代科学の勝

利は、科学に対する莫大な投資をもたらしている。しかし科学研究投資の額は、GDPの3%程度が限界だと経験的に語られている。日本の研究投資総額はすでに、その水準に達している。医療費の約45%、防衛費の約3倍の額である。かつてのような経済の拡大が期待できない以上、もはや研究への投資を増やすことができなくなっている。このため研究テーマを絞らざるをえなくなっている。

しかし長年にわたる社会の「官僚化」とこれと密接にかかわる「業界化」は、政治家が政治家に評価される政治を、官僚が官僚に評価される行政を、科学者が科学者に評価される科学を尊重する構造を形成している。したがって、学問や研究のテーマの選択は業界の内部の論理とは別の基準で行うしかなくなっている。とくに税金にもとづく学問や研究は、社会にとっての有用性の説明、アカウンタビリティが不可欠となっている（中島、1998: 62-63）。

官僚制は効果も大きい、それに劣らず弊害も大きい。官僚制化のもとでは、科学・技術の被害はすさまじいものとなる。その惨禍は早くから顕在化している。森鷗外は日本を代表する文豪として知られる。かれは時代に翻弄される人間の微妙な内面の動きを鋭く抉り出す。かれは死に際して、墓石に石見の国の人、森林太郎とだけ書くように言い残した。その気持ちに嘘はないだろう。しかしかれは医師の最高の地位である陸軍軍医総監に登りつめる別の顔をもっていた。

鷗外は麦飯の効果が明確になっていても、青山胤道東京帝国大学医科大学長とともにあくまで脚気伝染病説に固執する。かれは日露戦争で脚気が戦闘にともなう以上の戦死者や戦病者を出しながらも、麦飯の導入を無視し続けた。麦飯の効用は、兵士や海軍までが認めるにいたっていた。それどころか、一般庶民のあいだでは常識化していたのである。しかし陸軍と医学会だけは、それを否定し続け、白米食の優位を主張し続けた。森鷗外は細菌説をとった学者が次々と誤りを認めていったのも無視し、最後まで

誤りを認めなかった。

官僚は不都合なことに直面しても官僚機構の内部論理を優先しがちであり、情報操作による真相の隠蔽という誘惑に駆り立たれやすい。日本のハンセン病患者は治療法が確立した後も、長く悲劇的な生活を強いられることとなった。水俣病は水銀汚染の恐ろしさにとどまらず、被害者の拡大を阻止することがいかに困難なことかを明らかにした。厚生労働省の組織原理は、エイズの薬害をはじめ繰り返される薬害の発生と密接に関わっている。

科学技術の分野では、素人の批判が難しい。科学者は独善に陥りやすいばかりか、それに素人も追随しやすい。科学ジャーナリストはとかく科学者の研究の紹介に終始しがちである。L. マンフォードは、科学が、その規律に修道士のように没頭して生涯をささげた多くの『聖人』を生み出したが、政治体制に反逆した名高い殉教者を一人もつくらなかったと述べている (Mumford, 1970=1973: 61)。ソヴィエト体制下で平和運動を展開したサハロフ博士は、例外的人間である。多くの科学者が核兵器をはじめ化学兵器、生物兵器と自らを破壊する膨大な兵器の研究に勤しんでいる。

科学や技術は複雑化するほど、また巨大化するほど、誰にとっても一義的な効用をもつものではない。科学技術の功罪は複雑なものとなっている。原子力にしても、その最初の利用は大量殺人だった。こうしたなかで、科学・技術・社会系の全体像を特徴づける特性分析「STS 相互作用」が主張されている。(松本, 2002)。電力需要に対して、火力発電で応えるか原子力発電で応えるのかは CO<sub>2</sub> の増加か放射性廃棄物の発生かという、負の選択の問題である。移植医療も患者の救命とそのために動員される命という深刻な問題に直面している (清水, 2002: 162)。

かつて自由主義者、共産主義者、社会主義者、ファシストなど政治信条の別なく優生学にのめり込んでいった (Adams, 1990=1998: 471)。優生学の運動は突然に世界各地で消滅した。しかしそれは、社会に保護色を

もって溶け込み、新しい装いのもとに登場する機会をうかがっている。生殖のテクノロジーは優生学的な思考と関連しやすい。ユーゴスラビアの解体、ボスニアの内戦では優生学的な思考がいかに根強いものかを知らしめた。優生学を否定する社会にも、優生学的思想の臭いが漂っている。

最近、豊かな国では、出生率が急激に低下している。この世は生きるに値しない世界なのか、それとも子育てができないほど楽しい世界なのか。これに対して、貧しい国では高い出生率を示している。それは生の重要性を伝えようとしたいのか、それとも貧しさから逃れるために生が必要なのか。先進国では、運動不足と美食による肥満で健康を害する一方で、拒食症など摂食異常が広がっている。しかし途上国では過度の労働と粗末な食事で健康を害している。

近代科学と技術の進歩は次々と神の領域に入り込んでいる。科学と技術は神に代わって人びとの夢を実現してきた。人間はさまざまな欲求を、夢を描くことで実現してきた。今や人びとの夢は親、友人、書籍ばかりか、テレビ、携帯電話、パソコンなど電子媒体を通じて伝わってくる。人びとは一通のメールや1枚の宝くじからも、さまざまな夢を見ることができる。夢の実現への営みこそ、人を人間たらしめているのである。

#### 参 考 文 献

- Abrams, Philip, 1968, *The Origins of British Sociology: 1843-1914*, The University of Chicago.
- Adams, Mark B. (ed.), 1990, *The Welborn Science: Eugenics in Germany, France, Brazil and Russia*. Oxford University Press. (佐藤雅彦訳, 1998, 『比較「優生学」史』現代書館).
- Arent, Hannah, 1958, *The Human Conditions*, University of Chicago Press. (志水速雄訳, 1994, 『人間の条件』筑摩書房).
- Brown, Lester R., 2000, *State of the World 2000*, W. W. Norton & Company, Inc., N.Y. (浜中裕監訳, 2000, 『地球白書』ダイヤモンド社).
- Bryce, James (ed.), 1905, *Sociological Papers*, Macmillan & Co., Ltd.

- Cohen, Mark Nathan, 1989, *Health and the Rise of Civilization*, Yale University Press. (中元藤茂・戸沢由美子訳, 1994, 『健康と文明の人類史』人文書院).
- Collins, Randall & Michael Makowsky, 1984. *The Discovery of Society*, Third Edition, Random House. (大野雅敏訳, 1987, 『社会の発見』東信堂).
- Durkheim, Emile, 1897-98, F. Ratzel, Politische Geographie, in *Année Sociologique*, II. (小関藤一郎・山下雅之訳『デュルケーム・ドイツ論集』行路社 1993 年).
- 藤田弘夫, 1991, 『都市と権力ー飢餓と飽食の歴史社会学ー』創文社.
- 藤田弘夫, 1993, 『都市の論理』中公新書.
- 藤田弘夫, 2000, 『増補版 権力から読み解く現代人の社会学入門』有斐閣.
- 藤田弘夫, 2003, 『都市と文明の社会学ー環境・リスク・公共性ー』東京大学出版会.
- 市野川容孝, 2000, 「社会的なものの概念と生命」『思想』2月号.
- 市野川容孝, 2001, 「『社会科学としての医学(上)』」『思想』6月号.
- Kevles, Daniel J., Alfred A. Knoph, *In the Name of Eugenics: Genetics and the Use of Human Heridity*, New York, 1985. (西俣総平訳, 1993, 『優生学の名のもとに』朝日新聞社).
- 栗屋剛, 1999, 『人体部品ビジネスー「臓器」商品化の現実ー』講談社.
- Lucacs, Georg, 1954, *Die Zerstörung der Vernunft*. (暉峻凌三・飯島宗享・生松敬三訳『ルカーチ著作集 13 巻 理性の破壊』白水社).
- Giddens, Anthony, 1984, *The Construction of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press, Cambridge.
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press, Cambridge. (松尾精文・松川昭子訳, 1995, 『親密性の変容』而立書房).
- 中島秀人, 1998, 「科学技術社会の未来を決めるのは誰か」『iichiko』第48号 日本ベリールアートセンター.
- 松本三和夫, 2002, 『知の失敗と社会』岩波書店
- McNeill, William H., 1976, *Plagues and Peoples*, Anchor Press, Doubleday. (佐々木昭夫訳, 1985, 『疫病の世界史』新潮社).
- Mumford, Lewis, 1966, *The Myth of Machine: Thechnics & Human Development*, Harcourt Brace & World, Inc., N.Y. (樋口清訳, 1969, 『機械の神話』河出書房新社).
- Mumford, Lewis, 1970, *The Pentagon of Power: The Myth of Machine*, Harcourt

Brace & World, Inc., N.Y. (生田勉・木原武一訳, 1973, 『権力のペンタゴン』 河出書房新社).

清水透, 2002, 「現代医療と他者の命の物象化」『三田学会雑誌』第94巻4号.

Parsons, Talcott, 1978, *Action Theory and the Human Conditions*, New York, Free Press. (富永健一他抄訳, 2002, 『人間の条件パラダイム』 頸草書房).

Ponting, Clive, 1991, *A Green History of the World*, A. P. Watt Limited (石弘之訳, 1994, 『緑の世界史』下 朝日新聞社).

Ratzel, Friedrich, 1903, *Politische Geographie, oder, Die Geographie der Staaten, des Verkeher und des Kriegeres*, München, R. Oldenburg.

Ratzel, Friedrich, 1909–1912, *Anthropogeographie, I. II*, Sttütgart, J. Engelborn.

Sorokin, Pitrim, 1928, *Comtemporary Sociological Theories*, N.Y., Harper and Row.